

刊行にあたって

コロナ対応の ポイントは 記録とデジタル化



荒井昌海 Masami ARAI
東京都・エムズ歯科クリニック
MID-G 最高顧問

2020年、本来はオリンピック・パラリンピックイヤーであった。開催国の日本は多くの観光客を見込んで、都内には多くのホテルが新設された。しかし一転して、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の蔓延により、2020年は世界中にとって失われた1年となった。人の往来はなくなり、都市はロックダウンされ、多くの重傷者・死亡者・失業者を出した。われわれがこの1年から学ぶべきことは何であろうか。

現在(2020年12月)、1年経ってもこの状況に終わりはみえていない。早くAfterコロナが来ることを望んでいるが、われわれはWithコロナを長く続けていくという前提で、物事への決断力が必要になってきた。COVID-19は一時的なものではなく、年単位で続く可能性があり、われわれもいつ感染者になるかわからないし、自分の歯科医院がいつクラスターになるかわからない。

では、われわれは何から始めればよいのだろうか。患者さんのこと、スタッフのこと、助成金のことなど、やらなければならないことは多岐にわたる。多くの歯科医院において、方針を決めるのは院長であり、実践するのはスタッフ全員である。トップである院長が情報に疎く、決断が遅ければ、それは時として歯科医院の致命傷になりかねない。まずはやってきたこと、やらなければならないことを整理してみるのはどうだろうか。

エムズ歯科クリニックでは、コロナ対応の各ジャンル・各ステップを、マインドマップで整理している(図1)。これはさまざまな災害のたびに行っており、2011年の東日本大震災、2019年の台風15、19号でも同様の対応を行ってきた。人間は忘れる動物である。忘れるからこそ、つらいことがあっても生きていけるのだが、どれほどその災害時に重要であった内容でも、喉元すぎれば熱さを忘れてしまう。

加えて、その災害時に働いていたスタッフが辞めてしまえば、院長の記憶のみが頼りになってしまい、次の災害が起こったときには曖昧な記憶のみで対応せざるを得なくなるかもしれない。

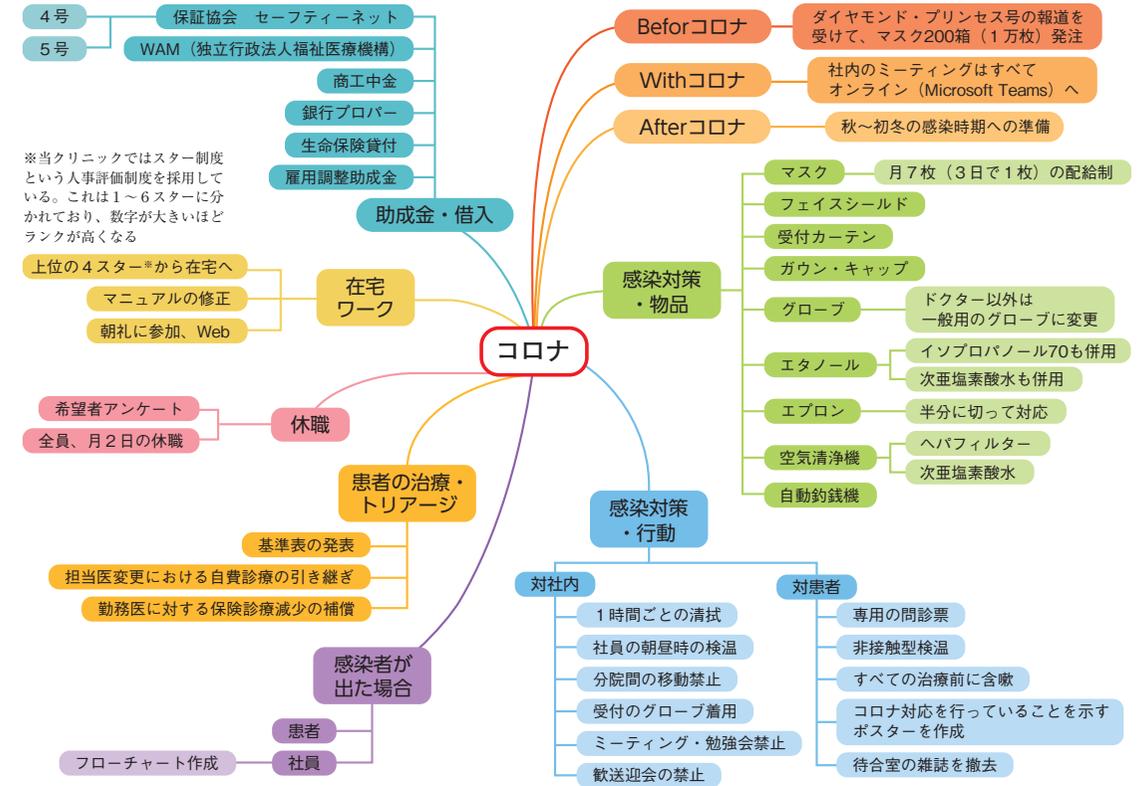


図1 コロナ対応の各ジャンル・各ステップをマインドマップで整理

本別冊はわれわれの備忘録である。読んだ結果、学ぶことも多いと思うが、今後の災害対策における復習を兼ねた、バイブルのような立ち位置になることを期待している。また、さまざまなデジタル機器やソフトウェアが紹介されている。たとえば、Web会議ツール「Zoom」はわれわれのコミュニケーションツールの最右翼として活躍した。ほかにも当クリニックでは、診察券をアプリにして受け渡しを廃止した。また、会計においては、保険診療の支払いでもクレジットカード決済やアプリ決済に対応し、自動釣銭機を設置して、現金のやり取りは完全に終了した。

また、学術情報の収集については、現地開催はたしかに素晴らしいが、Web開催(たとえば、第50回日本口腔インプラント学会記念学術大会など)も本当に秀逸であった。単に情報を得るという意味では、Webでできることも多分にあることを実感した。この「ステイホーム」の1年間が、学術情報の収集のデジタル化に大きなきっかけを与えたといえるだろう。MID-Gが以前から行っていた「e-ラーニング」、「マネキンと動画を使った実習(GPアカデミー)」、「Web配信の総会・セミナー」などが一般化したといえる。今後もこの流れはさらに加速し、デジタル化に対応できなければ、情報から遅れていくことになるであろう。

本別冊を手に取り、今回のコロナ禍の「これまでの復習」と「今後のデジタル化」のきっかけにしてもらえれば幸いである。